a.b.c. 2006 Spring
architectural bulletin of chikurikai
築理会報2006春号　2006年4月発行　Vol.38
東京理科大学工学部Ⅰ・Ⅱ部建築学科築理会事務局

「建築学科"九段校舎"に移る」

1962年に工学部建築学科が神楽坂に設置され、翌年(1963年)に７号館が竣工した。それから40余年、神楽坂校再構築事業の一つとして、建築学科を含めた工学部４学科(工業化学科は除く)は神楽坂を離れて、九段に移転した。靖国神社の大鳥居の正面、環境のいいところである。建物の改修については、P.4の「東京理科大学九段校舎」を参照していただきたい。九段校舎は７階建であるが、５階が建築学科で、１・２部共同じ階に入っている。神楽坂と違って各研究室がワンフロアーなので、一体感も生れそうである。それに築44年(７号館とほぼ同じ)であるが、全面的リニューアルされているので、神楽坂校舎よりはるかにきれいである。この建物はかなり傾斜のあるところに建っているので、靖国通りに面した南側は１階の入口、正面玄関の西側は２階、さらに北側は３階から入ることになる。又、コの字方の配置なので、廊下は長くなっている。校舎、敷地も仕方のないことだろうが、余裕を持っては建てられていないので、学生のいる場所は、教室以外となると、ちょっときついかもしれない。ただ周辺は北の丸公園、靖国神社、千鳥ヶ淵と、校舎から離れて時間をつぶす場所は十分にある。

九段校舎外観（靖国通りより見る）

ご案内
築理会３５周年記念総会・懇親会
「さよなら７号館、９号館」

東京理科大学創立125周年記念事業に伴い、昔の学び舎での最後の総会・懇親会となります。懇親会には理事長をお招きし、イベントも多彩に企画しております。又、2部建築学科創設30年でもあります。皆様のご出席をお待ちしております。

日　　時：　平成１８年5月２７日(土)
総　　会：午後４時
懇 親 会：午後５時　　７時半
催事概要：＊記念事業・神楽坂校舎整備計画の展示と説明
＊写真の展示(旧校舎の写真及びOBによる写真展)
＊建築学科卒業生の出版物の展示・販売
＊理科大出身歌手のライブ及び軽音楽
＊懇親会終了後、研究室のOB会も一部予定されております
会　　場：　東京理科大学(神楽坂1-3)１号館１７階　会議室
会　　費：　5,000円(当日払い)
＊5月10日までに郵便振込みをされる場合は4,000円です
＊郵便振込先　名義「築理会」
口座番号 00110-5-171952

参加申込：　事務局宛に「氏名・卒年・連絡先」をメール又はFaxで連絡下さい。
連 絡 先：　築理会事務局　　teru@rs.kagu.tus.ac.jp
Tel 03-3260-4271(内6689)
Fax 03-5213-0976

特集 SPECIAL FEATURE

海外で活躍するOB/OG

海外で活躍する方々に、町の様子や仕事のこと、暮らしぶりなどを報告していただきました。

デンマークに拠点を移して

勝目　雅裕（Ⅰ部14期）
schmidt, hammer & lassen

家族の半数がデンマーク人、ということもあって現在デンマークに居住して仕事をしています。

もともと、山下設計でＫＰＦやＰｅｌｌｉなどと協同したり、ＯＤＡでスーダン、ネパール、バングラディシュ、パキスタン、インドネシアなどで、教育、医療、研究施設をつくったりと、国外組みと盛んに仕事をしていたので、現在の海外生活もその延長線上のようなものです。

デンマークではschmidt, hammer & lassen (www.shl.dk)に勤務しています。王立図書館、オーフス美術館などを手がけているので、ご存知の方もいるかも知れません。

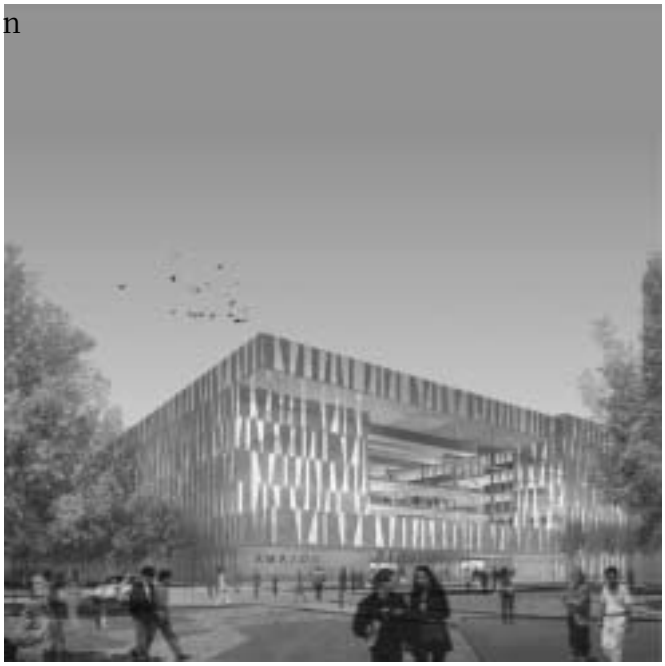
現在、ここで主力を注いでいるのがプラハのオフィスビル計画。建築デザインを我々ＳＨＬ，構造ＲＦＲ（パリ）、設備ＢＭｃ（ロンドン）、施主はオーストリア資本、建設は勿論チェコ。ボーダーレス化したパリやロンドンから参加している人たちが生粋のフランス人やイギリス人とは限らず、カナダ人、イタリア人、ドイツ人等もいて、打ち合わせになれば１０カ国の人が集まります。（ヨーロッパではごく当たり前の出来事なのかもしれませんが。）が、当然のことながら各人(種)が持つ建築に対する認識、手法は驚くほど異なります。僕の仕事はチーフアーキテクトで、多国籍軍の異なったベクトルを一つの方向に向かせなければいけない。いまこのチャレンジの真最中といったところです。皆、建築に「熱狂」し、つくることに「興奮」を求めている点が唯一の共通点でしょうか。

Reykjavik(concert hall)

この国は、ヒエラルキーのない非常にフラットな社会で構成され、外国人としては入り込みやすい。だだデンマーク語という言語は、到底不可能と思われる発声を強いられお手上げ状態です。こちらに来て既に数年立つのですが、言語の壁に阻まれて未だフラットな社会のその表層を浮遊しているというのが現状です。

土地などの不動産がそれほど高価でないので、海辺の片田舎にまとまった敷地を得て、羊十数頭と鶏数十羽、果物、野菜類は家庭菜園で、といった生活をしています。

年に２回は日本に帰っているので、機会がありましたらまた報告します。


Prague(office)

南米大陸『ボリビア共和国』へ

高橋　慎一郎（Ⅰ部36期）
建築家

南米大陸の中央に位置し、真っ青な空がどこまでも広がる「ボリビア共和国」(以下ボリビア)。この国には、塩の地平線が見られる「ウユニ塩湖」、南米三代祭りが開催される「オルーロのカーニバル」、アマゾンの大自然を堪能できる「マディマディ国立公園」など、数多くの魅力が凝縮されている。またボリビアは、標高の高い順にアルティプラーノ地区、バリェ地区、アマ

ゾン地区と、3地区に分けることができる。そして地区ごとに様々な文化や生活習慣などを体験できるのと同時に、異なった素材や構法を使用した民家を見ることができる。この国の第3の都市コチャバンバ(標高2,560m)に2000年9月、建築に関わるボランティア活動で始めて訪れた。その後、何度かこの国を訪れ、2005年5月から再びコチャバンバで生活を送っている。ここコチャバンバ市内は、市民の憩いの場である9月14日広場を中心として、碁盤目状に区画された中にスペイン統治後に建設された日干し煉瓦や焼き煉瓦などの積石造の風化した伝統的な建物と、近年建設された煌びやかなRC造の低中層ビルが混在している。

■土や自然素材の建築

最近は、学生時代から興味があった土や木などの自然素材を使用した身障者のための学習室などの設計と、日本の建築雑誌「左官教室」などへの執筆をしながら生活を送っている。また、仕事の合間を縫ってコチャバンバ近郊の日干し煉瓦などでつくられた古民家の調査や、中南米大陸の土の建築協会などによって開催される土や竹の構造体に関するセミナーにも参加している。

■中南米大陸の魅力

中南米大陸の多くの国々ではスペイン語が公用語として使われている。文化や生活習慣等がどこも似通っているのかというとそうでもなく、当たり前かもしれないが各国に文化や生活習慣、そして建築にも差異がある。学生時代からの夢だった土や自然素材を使った建築を設計する機会を得たということだけでなく、ボリビア共和国、そして途轍もなく広い中南米大陸に広がる魅力的な現代建築や古建築をさらに体験するまで、当分この大陸から離れられそうにない。

竹のドームの講習会

日本からシンガポールに移住し

吉川　道明（Ⅰ部28期）
KAJIMA OVERSEAS ASIA PLT LTD

何時の日か学校の前の池でゆっくりボートに乗ったり、釣堀で一日中糸をたらしていたいなんて思っていたのに実現せずに早13年が過ぎてしまいました。　ヤ93年に鹿島建設に入社以来、国内の現場を11年経験して一昨年にシンガポールに赴任しました。今では学生時代そして日本の騒々しさを懐かしく思います。

現在は10万平米を越える大型ショッピングセンター及びホテルの居ながら改修工事を担当しています。シンガポールは知ってのとおり他民族国家で、建設に携わる関係者(施主、設計、サブコン、労働者)も他民族の混合体です。海外で仕事をするなんてかっこいいなんて思っていたけど、文化や慣習の違いや民族混合体故の現場運営の難しさを経験しています、しかし思いどうりに事が運んだときの喜びは国内以上です。

休日には家族を連れて国内観光を楽しんでいますが、時おり襲ってくる豪雨はいただけません。皆さんシンガポールにマーライオンっていくつあるかご存知ですか？

不定期連載　現場へＧＯ！（第５回）

理科大創立１２５周年の記念事業として進む神楽坂キャンパス再構築。校舎の建て替えにあたって工学部の仮校舎となるのが九段校舎だ。築約４０年のオフィスビルを校舎にコンバージョン（用途変更）した。施工を担当した鹿島の米澤和芳氏（Ｉ部１８期卒業）を訪ねた。

「東京理科大学九段校舎」

九段校舎の改修工事で所長を務めた米澤和芳氏。
米澤氏のメールアドレスはk-yonezawa@kajima.com

地下鉄・九段下駅で下車して地上へ。日本武道館や靖国神社をランドマークとする景色に新たな"顔"が加わった。アイボリーのスラブと黒の柱のコントラストに、赤のラインがアクセントとして効いた外観。2005年12月8日に竣工式が終わった東京理科大学の九段校舎だ。理科大が都市基盤整備公団(現・UR都市機構)の旧本社ビルを取得し、キャンパスによみがえらせた。

神楽坂キャンパスでは大学創立125周年の記念事業として校舎の再構築を進めている。理科大が神田から神楽坂に移転して2006年でちょうど100年の節目ともなる。再構築事業のなかで目玉となるのが新２号館の建設。工学部などの校舎を取り壊し、超高層の校舎に建て替える。記念図書館や講堂も収める。建て替えにあたって工学部の仮校舎となるのが九段校舎だ。

九段校舎のエントランス部分の外観。靖国神社の隣にある

改修工事を担当した鹿島で所長を務めたのは、Ｉ部18期卒業の米澤和芳氏。「約1万6000㎡の床面積を持つオフィスビルを大学の校舎に用途変更した。これだけ大規模な校舎へのコンバージョンはこれまでもないだろう」と米澤氏は言う。標準では11～12カ月必要な工期を９カ月に短縮。工事の最盛期には15人のスタッフが現場に詰めた。設計・監理は松田平田設計が手がけている。

基礎杭を再利用して新たに増築した中央棟

改修工事で、まず重視したのは安全性だ。内部にRCの耐力壁を増し打ちしたほか、建物の外周は鉄骨のブレースで補強した。開口部の内側に設けた鉄骨ブレースは黒で塗っている。「メカニカルなイメージを持ち、意匠上のアクセントにもなっている」(米澤氏)。さらに、柱は炭素繊維を巻いて耐震補強した。

既存の設備などをなるべく生かして改修したのも大きな特徴だ。例えば、空調のダクトはそのまま利用し、中央制御の空調機も再利用した。内装については、床は傷んでいる部分だけ補修してタイルカーペットを張って仕上げた。「外装サッシもそのまま利用。ブラインドも既存のものをクリーニングして使うなど、無駄なく改修した」と米澤氏は説明する。

既存施設の利用でもう一つ大きなものが、基礎杭の再利用だ。改修工事では、建物の中庭にあった平屋の駐車場を解体して中央棟を建設した。その際、既存の基礎杭の耐久性や健全性を調査したうえで、補強のための杭を追加。S造・3階建ての中央棟を建てた。

一方、外壁については、広い範囲にわたってタイルの剥離や浮きがあったので、ピンネット工法を用いて補修している。「東京理科大学」のロゴが掲げられた部分は黒のルーバーで仕上げたもの。壁の面積が大きい部分がルーバーで覆われて意匠上のポイントとなった。

「九段校舎はもともと、鹿島の大先輩が約40年前に施工した建築。それを自分の母校のためによみがえらせることができて二重の喜びと誇りを感じる」。米澤氏はこのように締めくくった。　（森　清＝会報委員会）

大岩助手がチベット建築の著書を出版

東京堂出版　本体２６００円＋税

2005年9月、大岩昭之理科大建築学科助手（Ⅰ部3期）が写真・執筆を手がけた著書「チベット寺院・建築巡礼」が出版された。20年以上前から毎年のように取材に訪れ、建築史家として見つめ続けたチベットの魅力が凝縮された一冊だ。まだまだ文献も少なく調査も十分に進められていないチベットで、伝統的な仏教寺院をはじめとして民家やテントまで幅広く紹介している。さらに建築様式の変遷からディテールや構法の研究まで踏み込んだ貴重な記録書だ。著書の出版にあたって、大岩氏にチベットの魅力や調査秘話について語ってもらった。

未知なるチベット。大自然と共にある文化

ーなぜチベットに興味を持つようになったのですか。

大岩氏ー80年に池袋の西武百貨店でラダック地方の「マンダラ展」を見たのがチベットに興味を持った最初のきっかけです。壁画などの写真が多く展示されていたのですが、建築の写真もいくつか紹介されていました。その2年後に初めてラダックを訪れて、荒涼とした大地に建つ寺院のたたずまいに強く引きつけられました。ただ単に自然があるというのではなく、大自然のなかに仏教の文化がある。それ以来、毎年のようにチベットを訪れています。私にとって海外旅行というとチベットだというほどで、ほかの国にはほとんど行ったことがないですね。

ー美しい写真から広大で色鮮やかなチベットの文化がにじみ出てくるようです。著書のなかで使われている写真は、すべてご自身で撮影したということですが。

大岩氏ー写真は兄が趣味でカメラをやっていて、子どものころから現像を手伝ったりしていました。82年にラダックを訪ねたときには35ミリの普通のカメラだったのですが、どうせ行くならちゃんとした写真を撮りたいなと思うようになり、83年にポタラ宮を訪れたときからは今も愛用しているハッセルブラットSWC/Mを持っていくようになりました。チベットには何人かで行くことが多く、何時間もシャッターチャンスを待つわけにはいかないので短い時間で撮っていることが多いですね。チベットは高度があるので空気に透明感があって、日本で撮ったよりもきれいに撮れます。

ーチベットに関しては参考文献も少なく、調査といっても大変だったのではないですか。

大岩氏ー94年にポタラ宮の大修理が行われて図面が公表されたこともあり最近では多少、資料が出てきましたが、今でも本格的な調査はほとんど入っていません。例えばチャンタン高原のテント寺院などは、中国の本にも写真はなく、「80本の支柱のあるテントがある」という記述だけでどこにあるのかも定かではありませんでした。実際に行ってみるとテントの規模が小さくなっていたのですが、訪れる人が少ないため記述が直されていません。寺院の方も日本人は始めてだと言っていましたし、おそらく日本では誰も撮っていないめずらしい写真が撮れたと思います。

一番行くのが大変だったのはドルポです。ここは車が入れない地区だったので、空港から先は1カ月近くすべてトレッキングでした。車で行ける地区でも整備が不十分なところが多いので、崖から車が落ちている光景もよく見かけます。

ーたださえ参考資料の少ないチベットで、こうした建築的な調査資料は貴重ですね

大岩氏ー今は研究結果を建築学会で発表しようと思っても審査する人がいないというのが現状です。実はチベット学会というのがあって、そこで研究内容を発表しています。そこでもほとんどが仏教関係で、文化的な内容のものはたまにしか出てきません。さらに1年10題程度しか発表の機会がないので一度発表すると何年か発表の機会がなくなってしまう。今まで4回発表してきたのであと一回は発表しておきたいところですね。

まだまだ未開発の部分もあるというのもチベットの魅力の一つです。チベットの建築は、基本的に壁が土、石でできていて内部の柱、梁、垂木は木です。陸屋根がほとんどで、柱は2mから3m間隔でずらっと並んでいて日本の仏閣とは大きく違います。建築をやっている人にはこういうのもあるんだよという刺激にもなると思います。研究価値もあると思うので。これからもっと注目が高まってくるのではないでしょうか。

７階建てのナムセリン荘園・チベット

築理会賞決定！

3月20日の卒業式当日に、築理会賞の発表と受賞式が行われました。Ⅰ部・Ⅱ部とも成績優秀者と卒業制作の優秀者が各１名ずつの計4名に、三松会長から賞状と副賞が授与されました。受賞した皆様の、今後のご活躍に期待したいと思います。

Ⅰ部　成績優秀・西澤　大

私は4年生の一年間に何ができたのか、ということが大学生活で一番大切なことだと思います。人から与えられたことをこなすのではなくいかに自主的に一生懸命取り組めたか。それこそが誇れることだと、最終学年を終えて痛感しました。

大学生活は終わりましたが、人生はまだ始まったばかりです。進学する大学院、そして働く場など、これから自分に与えられるそのステージ毎に自分に嘘偽りなく真剣に取り組んでいけるよう決意を新たにして授賞へのお礼の言葉とさせていただきたいと思います。

Ⅰ部　卒業制作優秀・青木　公隆

築理会賞(卒業制作)というすばらしい賞を頂けて大変うれしく思います。今回、卒業制作で築理会賞を頂きましたが、この賞は自分一人の力で受賞したとはとても思えなく、僕の卒業制作の関わったすべての人のおかげであると感じるとともに、感謝を申し上げます。受賞者の言葉としては、僕が卒業制作を行う上で考えたこと、学んだことをこれから卒業制作を行う後輩へのメッセージとして書きたいと思います。

卒業制作で重要なことは、社会の問題設定などがありますが何より重要だと感じたのは、共に卒業制作をする仲間の存在でした。仲間とは、同学年の友人や手伝ってくれた後輩です。仲間の一言一言が僕の作品に多大な影響を与えました。約三週間、理科大の九段校舎に泊まり込みで仲間と過ごした時間はとても充実したものであったし、僕を成長させてくれました。卒業制作はたしかに辛く、苦しいものでしたが、それ以上に得られたものはおおきかったです。

Ⅱ部　成績優秀・本橋　善夫

この度は築理会賞をいただきうれしく思っています。私は現在５７歳になります。機械工学科を出て25年ほどFR乗用車の設計、企画・基本設計の仕事をしてきて、退職後2部建築学科に編入しました。入学当初は頭の回転が悪く大変でしたが、仕事が工学に関係するものだったせいか、２ケ月ほどで脳が対応するようになり、それ以降は楽でした。私のような年寄りにも優しく対等におつきあい頂いた同級の皆様のお陰で楽しく3年間を過ごすことができました。今後は建築設計製図を趣味の一つに加え、残りの余生約20年を気楽に楽しんで行こうと思っています。最後に今後の理科大建築学科の益々のご発展をお祈り致しております。

Ⅱ部　卒業制作優秀・雫石　令子

新宿駅の南口方面への移設と、それに伴う北側コンコースの自由通路化という実際の計画をもとに、駅ビルMY　CITYを敷地に､｢街と都市空間｣をテーマとした商業施設を計画しました。施設内に自由通路を引き込み、そのまま回遊、上昇する動線を計画、その両側には店舗、住居など街を形成するものをテナントとして集約しました。日々変わり行く街の風景と、そこから生まれる都市の活力やヴァイタリティを直接的に感じ取れる施設にしたいと考えました。この度、作品に対し名誉ある賞を頂き、大変光栄に思っております。ご指導頂きました先生方、お手伝い頂いた友人、後輩達に心より感謝を申し上げます。今後は、社会に少しでも貢献できるよう精進して参りたいと、改めて身の引き締まる思いです。

左側写真：Ⅰ部の受賞者　三松会長の左が西沢さん、右が青木さん
右側写真：Ⅱ部の受賞者　三松会長の左が雫石さん、右が本橋さん

新任講師紹介

長井　達夫
工学部第一部建築学科　講師

昨年4月に工学部第一部建築学科に着任しました。専門は建築環境工学で、特に熱分野、すなわち室内外の温熱環境や省エネルギー建築、また空調設備のエネルギー評価等を主な研究対象としています。最近取り組んでいる具体的なテーマは、業務用建物における躯体蓄熱空調システムの制御法の開発、住宅における断熱性能の現場測定法の開発、同じく住宅における通風利用に関する研究などです。

講義では、建設会社在籍時の経験を活かして、設備設計に関するかなり実践的な内容を盛り込むように努めています。そのようにして、設備設計という職能があることを学生たちに理解してもらえたらと思っています。

卒業生たちが、いつの日にかそれぞれの進路先で、大学時代に学んだことが少しでも役立っていると感じられるような教育ができればと思っています。

[略歴]

1989年　東京大学工学部建築学科卒業
1991年　同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
1994年　同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士(工学)
1994年　鹿島建設株式会社(建築設計エンジニアリング本部、および技術研究所)
1999年　大阪市立大学生活科学部
2005年　東京理科大学工学部着任

はみだしチクリ　銀座「エノテカピンキオーリ」もの凄くスペシャルなことで行きました。料理、お酒、雰囲気、サービス、全てにおいてスペシャルでした。

第五回ちくご会に参加して

乙丸　勝範（Ｉ部６期）
独立行政法人都市再生機構

当日（平成17年12月3日（土））の電車参加は、小生1人。開通間もないつくばTXの研究学園駅に午前7時に到着。

駅周辺は、まだ開発途上で駅広・幹線道路以外はほとんど未整備の状態でした。

同期(6期)の天野氏にピックアップされ、無事コースに到着。車組は、高速道路の事故で遅刻者もいましたが19人全員が無事スタートできました。

さて、小生は、前回優勝の天野氏の誘いに乗り当ゴルフコンペに初参加させてもらいましたが、同期のメンバー以外は誰も知り合いがいない状況でした。

同じ築理会で、ほぼ同年代なのにもっと早く知り合っていれば仕事・遊び等いろいろな面でお互い協力し合えたのかなと思ったりしました。

ところで、肝心のゴルフについて簡単にご報告します。

天候は、晴れ・微風。絶好のゴルフ日和でした。豊里ゴルフクラブは、丘陵コースなのですが池も多く小生には難しく思えました。

スコアは、各自それぞれ８３から100強と相当のレベル差がありました。小生は、９９とやっとの思いで１００が切れました。

ダブルペリア方式のハンデに助けられて、小生が初参加・初優勝となった次第です。又ご褒美に当該原稿を書くことと次回の幹事をおおせつかりました。

最後になりますが、平成15年12月の第一回のちくご会(9人参加)から春・秋年2回の開催で今回は19人参加。会を重ねるごとに参加者も増えています。

ちくご会を通して築理会いや理窓会のさらなる活性化を図り、わが母校東京理科大学の益々の発展・飛躍に貢献したいものです。

建築学科５期生卒業３５周年記念会報告

神楽坂建築5期会
http://cyber21.no-ip.info/~k5ki/

1970年3月卒業の我々5期生は、数回の準備会を行い、卒業35周年記念会を2005年10月22日（土）15時より理窓会館にて開催しました。15年前にも20周年記念会を開催しました。

卒業以来の再会を果たした仲間もいて、大変有意義な時を過ごすことができました。来賓の先生方からは人生の先輩としての貴重なお話を賜りました。そのひと時をここで紹介したいと思います。

神楽坂建築5期会はホームページがあり、理窓倶楽部にて年間数回の集まりを開催しております。

出席者

安藤順康　石神一郎　石橋利彦　橋政昭　岩城知宙　植野寿　大久保貞吉　椿康子(大沢)　大橋和男　加藤博　河森良岳　菅野弘司　菊地昇　木村有作　古池廣行　坂井誠次　佐治浩一　沢辺司　庄司欣也　高田一　宝田和美　千葉寿彦　野田正治　野々瀬暁　野村哲三　日比野正夫　廣川芳典　広瀬晃　堀川修　増間剛　宮田健治　向井章悟　村田茂幸　多賀章　穂積秀雄　萩原久和　高橋文洋

左から武井先生、井口先生、平野先生、岩倉（元助手）

パーティは数学科出身歌手「祥子」さんが盛り上げた。

築理会ランナーズ活動報告

恒例の駅伝大会に参加し下記の成績を納めました。月例の練習会に皆様のご参加をお待ちしております。詳しくは築理会ホームページをご覧下さい。（入野）

大会名：ＥＫＩＤＥＮカーニバル2005西東京大会
日　時：2005.11.12
種目名：23ｋｍロング走 友・クラブ男子の部
タイム(グロス)：1時間49分04秒
総合順位：　324位　（1043チーム中）
種目別順位：　103位　（237チーム中）

同窓会活動報告－Ｉ部１４期（１９７５年入学又は１９７９卒業）

昨年も１４期のミニ同窓会を７月に開きました。もりあがっているところに震度５の地震がありましたが、さすが建築学科出身メンバーはあわてることなく、情報を集め電車が動き始めるまで語り合い楽しい一時を過ごしました。　今年も同窓会を開きますのでぜひご参加下さい。（佐野）

「築理会」の揺籃期

最初の「築理会名簿」がある。昭和46年(1971)４月発行、１部６期までの名簿である。

卒業者数558名、A5版、63ページのささやかなものであった。昭和41年に始めて卒業生が出て５年後、この年、東京理科大学工学部建築学科同窓会「築理会」が発足し、11月には「家の光会館」で最初の総会・懇親会が開かれている。〝築理会〟の名称は、お分かりのように"建築"の"築"と"理科大"の"理"を取ったもの。これには"理想を築く、理念を築く"の意味もあったようである。当時の記録では懇親会の会場は、教員のテーブルと各期(６期まで)のテーブルが用意されており、なごやかな雰囲気で開催されたと想像がつく。会則も制定され、その目的として「本会は会員相互の親睦向上を計る事を目的とする」と定められた。この時、小山一郎氏(２期)を会長に選出している。この年の決算報告(歳入)を見ると、全体の歳入約41万円の内、建築学科費５万円、学科基金25万円と記されている。発足当時は学科に大きく依存していることがわかる。そして最初の「築理会名簿」の発行人には武井正昭先生の名前が記されている。卒業５年目で同窓会をつくろうとの機運が卒業生、教員共々で盛り上がっていた結果であろう。なお、築理会名簿の表紙として長く使われている神楽坂のイラストは昭和46年当時の神楽坂を表すものであり、小山一郎氏の作によるものである。

（３期大岩昭之「東京理科大学工学部建築学科40年間の記録」より）

「このイラストには９号館はまだ描かれていない」

平成１８年会費納入のお願い

現在、平成18年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費　　3,500円
加入者名　築理会
口座番号　郵便局　00110－5－171952

インフォメーション

■「平成１８年度版東京理科大学建築学科名簿」発行

今回の名簿は平成16年から17年にかけて行われた築理会名簿確認作業のデータに基ずき、今までの名簿に比べて記載はかなり更新されています。

「編集後記」

九段校舎への移動によって神楽坂キャンパスの再構築が本格化し、建築学科のあった7・9号館が解体されることの報告記事を、皆様はどのような思いでご覧になったのでしょうか。私には神楽坂校舎最後の卒業生である今年の築理会賞受賞者の皆さんの笑顔とセットの思い出となりました。（広谷純弘hiro@archivision.co.jp）

築理会報2006春号
2006年4月発行　Vol.38
発行所　：東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部Ｉ・II部建築学科
築理会事務局　03-3260-4271(内6689)
03-5213-0976(FAX)
編集長　：広谷　純弘
編集委員：石神一郎、森清、伊藤学、安達功、渋川克也、山名善之、平賀一浩、菊池宏、東有紀
印刷発送：グローバルシステム株式会社